太陽とウィトゲンシュタインの宗教体験

――一九三七年三月に書かれた『哲学宗教日記』の分析――

星川啓慈

論文要旨

ウィトゲンシュタインの私的・宗教的体験が赤裸々に書かれている『哲学宗教日記』の第二部は、彼の神観・宗教観や宗教体験を知るには第一級の資料である。しかしながら、この『日記』を理解するためには、どうしても彼が篭ったショルデンの小屋の跡を訪れ、人里から隔絶されたその地理的・自然的環境を実際に確かめてみないと理解できない部分が多い。例えば、太陽の描写や彼の孤独感や宗教体験はそれらと切り離しては理解できない。筆者は、二〇一四年三月四日、その小屋の跡（写真は本文末に収録している）を訪れる機会を得た（その模様は註18の①のYouTubeにアップした動画に収められている）。

本論文では、第一次世界大戦中に書かれた『秘密の日記』の記述も踏まえながら、『哲学宗教日記』に頻繁に出てくる「太陽」や「光」が、「単独者」としてのウィトゲンシュタインが神と対峙するときにどのような役割を果たしたのか、を考察する。結論をいえば、「一九三七年三月二六日、小屋から見える春先の暖かい太陽の光が、彼に落ち着きのある宗教体験をもたらすことに寄与した」ということになる。

キーワード
太陽、光、神、宗教体験、ウィトゲンシュタイン

はじめに

いわゆる「コーダー遺稿」[1]が、一九九三年に知られるようになってから、ウィトゲンシュタイン研究は一つの曲がり角を迎えた。象徴的なタイトルをもつ書物をあげるとすれば、クラゲとノードマンの『ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン――私的な場合と公的な場合』（二〇〇三年）[2]をあげることができよう。彼の神や宗教などに関する「私的な」文書や遺り取りが、それまで以上に脚光を浴びるようになったのだ。この著作の中に、『哲学宗教日記』[3]（文脈に応じて『日記』と略記）の英訳も収められている。

また、遺稿管理人が出版しなかった『秘密の日記』[4]――現在『草稿一九一四―一九一六』として出版されている著作と同じノートの左側のページに並行して書かれた日記――には、神への祈り[5]や戦闘体験を含め、ウィトゲンシュタインの赤裸々な姿が記録されている。

これら二つの『日記』は「宗教者ウィトゲンシュタイン」を理解する上で、第一級の資料である。これらを読んだネトは「完全無欠（the Perfect）に向かう道を見出そうとするウィトゲンシュタインの苦行の文書」[6]と評しているが、筆者もそのように感じる。彼は「完全なる人間」を目指すのであるが、それは苦難の道のりであった。彼自身、こう書いている。

新約聖書に述べられていることのどれだけが正しく、どれだけが間違っていようとも、疑えないことが一つだけある。つまり、正しく生きるためには、私は自分に心地よい生き方とはまったく違ったように生きなければな

らないだろう、ということである。すなわち、生きるとは表面で見えているよりもずっと真剣なものだということである。生きるとは恐ろしいほど真剣なことなのだ。（傍点引用者、一九三七年二月一三日）

本論文では、その苦難の道のりの一側面を、ショルデンにおける冬から春にかけての太陽の状態との関わりで考察する。ただし、例えばこの二月一三日や二二日の日記に見られるような、極めて生々しい事柄を問題とするのではない。精神的に落ち着きを見せる、ないし、一つの宗教的境地に到達した、一九三七年三月二六日の日記に焦点を合わせて考察をすすめていく。

鬼界彰夫の指摘

本論文での考察の中心となるウィトゲンシュタインの言葉は、一九三七年三月二六日のものである。

私は、自分のあるがままにおいて、自分のあるがままに照らされ、啓かれている。私が言いたいのは、私の宗教は、そのあるがままにおいて、そのあるがままに照らされ、啓かれている、ということだ。（Ich bin so erleuchtet als ich bin; ich meine: meine Religion ist so erleuchtet, als sie ist.）

「照らされ、啓かれている」の原語は、Licht（光＝英語の light）から派生し、「照らす、啓蒙する、悟る」などの意味をもつ erleuchten の受動態である。『日記』の訳者である鬼界は「この動詞はウィトゲンシュタインが自己の宗教性の展開を表現する上で、最も重要な言葉であり、最初は第一次世界大戦中に心の闇を神が照らす事を祈るときに用いられた[7]」と言う。そして、『日記』に先行する大戦中の具体例として、一九一六年三月二九日の『秘密の日記』をあげる。

これから監察である。私の霊は委縮しきっている。神よ、我を照らし給え（erleuchte mich）！　神よ、我を

照らし給え！　神よ、我が魂を照らし給え（erleuchte meine Seele）！（一九一六年三月二九日）

しかし、このerleuchtenという語は、『秘密の日記』では頻繁に見られるのではない。筆者の調べでは、後ほど引用するが、あともう二か所（一九一四年九月一五日、一九一六年五月四日）にしか見られないのだ。

だが、この語は使用頻度が低いから重要ではない、ということにはならない。この語が使用される文脈には重要な共通点がある。それは、ウィトゲンシュタインが死に直面している状況において使用されていることである。

さらに、鬼界は、erleuchtenは一九一六年三月二九日の場合とほぼ同様の意味で、『哲学宗教日記』においては次のようなところで現れると言う。

明日、私の信仰は今日よりも明るくなったり（あるいは、暗くなったり）することはあるのだ。助け給え、照らし給え！　そして、決して闇が私の許を訪れませんように！（一九三七年三月二三日）

それ〔純粋な服従によって死ぬこと〕は恐ろしいことだ。この恐ろしさが、ある光の輝きによって照らされますように！（同年三月二五日）

これらのerleuchtenの用例は「心の闇を神が照らす事を祈るときに用いられた」のであるが、一九三七年三月二六日の書付の場合、鬼界は「心の闇が上からの光により照らされると同時に、それをきっかけとしてウィトゲンシュタイン自身の宗教性が、ある境地、すなわち信仰に到達するという意味も込められている」と述べて、だからこそ「照らされ、啓かれている」と訳したのだと言う[8]。つまり、「照らされている」だけでよいところに、わざわざ「啓かれている」を加えたというのである（ちなみに、英訳はilluminatedである）。

本論文においては、こうした鬼界の指摘を踏まえながら、「太陽がウィトゲンシュタインが落ち着きのある宗教的境地に到達することに寄与した」ことを論じる。言いかえれば、「本論文で見るような太陽とウィトゲンシュタインとの種々の関係がなければ、『日記』で書かれているような宗教体験は彼にもたらされなかった」ということである。

ウィトゲンシュタインの「小屋」と一九三六年―一九三七年頃の執筆活動

ウィトゲンシュタインの「小屋」は、一九一四年の六月（異説あり）に、ノルウェーの「ソグネフィヨルド」の最奥部に位置するショルデンに建てられた。

小屋の位置と規模およびその環境は次のようになる。小屋の位置は、北緯六一度二九分一五秒、東経七度三七分五四秒。石組みの上の部分の湖面からの高さは、二〇メートル程度。西側の湖に向かっている基礎部分の石組みの幅は、横八メートル、奥行七メートル。さらにつけ加えると、小屋は周囲を山々でかこまれており、小屋のある位置は日当たりが悪い。航空写真で見ると、周りには陽が当たっていても、小屋の周辺は日陰になっている。[9]

一九七一年に小屋の跡を訪れ、湖畔と湖上から基礎の石組みを見た黒崎は、次のように述べている。

見たとたん、私は全く「凄い」と思った。そして私は、ウィトゲンシュタインの壮絶な生き方の一端にふれた思いがした。人里離れた所に住むとはいえ、これほど無遠慮に他人の接近を拒絶できる場所は、そう多くはあり得ないであろう。[10]

また、マクギネスは次のように語っている。

この小さな家には湖を隔てて素晴らしい眺望があり、フィヨルドが南西方向に開けている。家屋それ自体も、夏のあいだ、蔦で蔽われ緑樹で囲まれると、十分に快適な様相を呈した。だが、そこに冬のあいだ中棲みつくには、隠者か苦行僧〔柱頭行者、高柱の上に住み俗世間から離れて苦行した禁欲者〕のような気質を必要とするであろう。相当の勇気も必要である。[11]

「無遠慮に他人の接近を拒絶できる場所」「冬のあいだ中棲みつくには、隠者か苦行僧のような気質を必要とする」という表現は、先のネトやウィトゲンシュタイン自身の言葉とも呼応するであろう。

ウィトゲンシュタインは、一九三六年の八月中旬から一二月の初めまで、一九三七年の一月末から四月末まで、

一九三七年の八月中旬から一二月中旬まで、ショルデンに滞在する。『日記』の日付は、次のように、大きく三つに分類できる。①一九三六年一一月一九日から一二月一日まで、②一九三七年一月二七日から四月三〇日まで、③一九三七年九月二四日のみ。以下においては、太陽・神・宗教についての記述が頻出する②を中心に、議論を展開する。

ところで、『哲学探究』（以下『探究』）には神や宗教のことは（まったくではないにせよ）ほとんど出てこない。この著作がアウグスティヌスの『告白』の引用から始まることは知られているが、その冒頭および全体には宗教色はほとんど無い。しかし、この著作の背後には、ウィトゲンシュタインの宗教的な葛藤があるのだ。早い時期に、ドゥルーリーは「私はすべての問題を宗教的観点から見ないではいられない」という言葉を彼から聞いて、『哲学的考察』が「神の栄光」に捧げられていることや、『探究』で論じられている諸問題が宗教的観点から見られている可能性に言及している。ドゥルーリーは、当時ほとんど無視されていたウィトゲンシュタインの思索の次元の一つが「宗教」だった、と言いたかったのである。[12]

その後、「ウィトゲンシュタイン文献学」の成果を利用することができるようになり、新発見の資料も精読した、鬼界は次のように力説している。

> 『哲学探究』という記念碑的著作は、この〔ウィトゲンシュタインの〕宗教の歩みの結果としてのみ生み出されたのである。これこそが日記が我々に与える最大の驚きである。日記第二部〔『哲学宗教日記』の一九三六年から翌年にかけて書かれた部分〕とはこうした彼の宗教の歩みと『探究』生誕の忠実な記録である。[13]（傍点引用者）

『探究』は、それまでの研究を放擲し、一九三六年一一月から書き始められる。この時期には、第一部第一節から第一八八節に相当する部分が書かれた。つまり、この時期は「後期ウィトゲンシュタイン」の哲学的基礎が確立したきわめて重要な時期なのだ。そして、まさにその時、つまり、同年同月一九日から『日記』の第二部は書き始められるのである。

この事実は特筆に値する。ウィトゲンシュタインは冷静に哲学的な思索を展開している（哲学的には苦難の道を歩

んでいるのは分かるにしても）ようでいて、実はその裏には、それと並行する彼の「宗教的人間」としての生々しい姿があったのだ。

「神に語ること」と「神について他人に語ること」

『日記』の中に、ウィトゲンシュタインの「公的な」哲学と「私的な」宗教とを結びつける、決定的に重要な言葉が二つある。それは、厳冬期の一九三七年二月一五日と翌一六日に書かれた次の言葉である。

これらの〔宗教的〕像や〔宗教的〕表現は、むしろ生のある高い領域においてのみ、その生命を保持するのである。この領域においてのみ、それらを正しく使うことができるのである。本当のところ、私にできるのは、「語りえぬ」といったことを意味する仕草をし、何も語らないことだけだろう（Ich könnte eigentlich nur eine Geste machen, die etwas Ähnliches heißt wie “unsagbar”, & nichts sagen）。（二月一五日）

この言葉は、『論理哲学論考』（以下『論考』）の出版から二五年余りたっても、ウィトゲンシュタインは当時と同様の公の見解を抱いていることを示している。

だが、その一方で、ウィトゲンシュタインは『論考』の終わりで、神について「語りえないものについては沈黙しなければならない」と「沈黙」を命じておきながら、「私的な」生活ではそれを無視して、神に向かって饒舌なまでに語りかけている[14]。これは矛盾であろう。

この矛盾を解く鍵が次の言葉である。

神に〔向かって自分が直接に〕語ることと、神について他人に語ることは違う（Es ist ein Ding zu Gott zu reden & ein anderes, von Gott zu Anderen zu reden）。（二月一六日）

ウィトゲンシュタインが『論考』で禁じているのは、語りえない「神」に「ついて」（von）語ることである。『論考』の「語りえないもの」を直訳すれば、「それについて語ることのできないところのもの」（Wovon man nicht sprechen kann）となる。解釈の仕様によっては、『論考』の最後でも、「単独者」として神に対峙した人が神に向かって直接語りかけることを禁じているのではないのだ。

ウィトゲンシュタイン自身によるこの区別――「神に語ることと、神について他人に語ること」――は決定的に重要である。『日記』において、彼は「単独者」として神に語りかけていることはあっても、神について、例えばその属性について他者に向かって話したり書いたりしているわけではない。その証拠に、右の二月一六日の言葉を挟んで、次のように書かれている――「神よ！　私をあなたと次のような関係に入らせてください！　そこでは私が〈自分の仕事において楽しくなれる〉という関係に！」「〔神よ！〕私の理性を純粋で穢れなきように保たせてください！」。これらは神への請願／嘆願である。さらに、「孤独を求めてノルウェーに来たことを神に感謝します！」（二月二〇日）は、神に対する感謝を表している。

ウィトゲンシュタインの『日記』における神についての言及の多くは、請願／嘆願や感謝など、「神への直接の語りかけ」であり、「神についての記述」ではない。言いかえれば、彼はそうした「言語行為」をおこなっているのだ。世界の「創造者」としての神について語っている部分もあるが、基本的に神の属性記述はあまり見られない。もしも彼に「神は〈記述の束〉かそれとも〈固有名〉か」と尋ねれば、後者であると答えるだろう。

そうだとすると、本人が意識していたか否かは別として、ウィトゲンシュタインは右で指摘した矛盾した行為――一方で公に、神について「沈黙」を命じておきながら、他方で私的に、神に向かって饒舌に語りかけていること――をしているのではないことになろう。だからこそ、彼は、私的な文書では神に対して、積極的／衝動的に語りかけているとも解釈しうる。

第一次世界大戦の戦闘における神と光

ウィトゲンシュタインは、一九一四年八月より捕虜から自由の身になる一九一八年の八月まで、四年にわたる軍隊生活をする。[15] 彼は、両側性鼠蹊ヘルニアや腸カタルなどに悩まされながらも、また屈強な体格でもないのに、[16] 数々の激戦で勇敢に闘い、種々の勲章を得ている。自らが属していたオーストリア＝ハンガリー軍の第二四歩兵師団の兵士の生還率が二〇パーセント程度（一六〇〇〇人中三五〇〇人程度）だったブルシーロフ攻勢[17]を始めとする数々の激戦をかいくぐって、彼が無事に生還できたことは一種の奇跡である。厳密な確率計算は無意味だとしても、私見では、ウィトゲンシュタインの全戦闘を通じての生還確率は高く見積もっても一割を超えなかったであろう。度重なる激戦は、彼の神観や宗教観を考えるうえで、最も重要な出来事である。

戦闘状態や危険な状態が近づくと、宗教的な書付が増える。そのさいのキーワードは、頻出する「神」はもちろんのこと、数は少ないが、「照らす」「光」である。それらを従軍中に書かれた『秘密の日記』から、時系列にそって拾ってみよう。

銃撃戦になったら、どのように行動すればよいのだろう。自分が撃ち殺されることを恐れはしないが、任務を適切に遂行しないことを恐れる。神よ、我に力を与え給え！　アーメン。アーメン。アーメン。（一九一四年九月一二日）

神よ、私と共にいてください！　今では私はまともな人間になる機会があるといってもよいかもしれない。私が死に直面しているからである。霊が私を照らしてくれますように。（一九一四年九月一五日）

ロシア軍はクラカウに向かって快進撃している。市民はみな街を離れなければならなくなってきている。事態はわれわれにとって非常に悪化しているように見える！　神よ、我を助け給え!!!（一九一四年一一月九日）

これから監察である。私の霊は委縮しきっている。神よ、我を照らし給え！　神よ、我を照らし給え！　神よ、

我が魂を照らし給え！（一九一六年三月二九日）

たぶん明日、私自身の要望により、偵察に派遣されるであろう。そのとき初めて私の戦争は始まる。そして、おそらく私の人生も。たぶん、死の接近が私に人生の光明（das Licht des Lebens）をもたらすであろう。神が私を照らしてくれますように。（一九一六年五月四日）

たしかに、ショルデンで過ごした比較的平穏な日々と、いつ命を失うかもしれない従軍中の日々とを、同次元で論じることはできない。しかしながら、ウィトゲンシュタインにも、多くの人々と同様に、危険を感じたときや窮状に陥ったときには神や光や霊を求めるという、一種の思考パターンがある。

従軍期間と小屋での滞在期間との共通項

ウィトゲンシュタインの従軍期間と小屋での滞在期間には、複数の共通項がある。ここでは、二つないし三つあげたい。

一つは、これまで見てきたように、「光」である。これは、『秘密の日記』では、霊的／精神的な光であり（「太陽」という言葉は一度も登場しない）、『哲学宗教日記』では、こうした光にくわえて、「太陽」の物理的光である。

もう一つは、「孤独」である。ウィトゲンシュタインには従軍中なかなか一人になれる時間はなく、多くの若い兵士たちと一緒に過ごさなければならなかった。彼と気の合う将校たちもいないわけではなかったが、多くの場合、周りの人間とうまくやっていけない旨を『秘密の日記』で執拗に書いている。周りの人間に対する悪口を認めながらも、彼らとうまくやっていけない自分を責めている。つまり、多くの兵士たちに囲まれながらも、精神的には「孤独」であったということだ。また、『哲学宗教日記』には、「今私は心が不確かな時、頻繁に、〈ここには誰もいない〉と自分に向かっ

て言い、自分の周りを見渡している」（二月二二日）、「自己とともにある孤独――あるいは神とともにある孤独――とはたった一人で猛獣と一緒にいるようなものではないか？　いつ襲いかかられるか分からないのだ」（四月一七日）などと認めている。やはり、ショルデンの小屋では、物理的にも精神的にも「孤独」であったのだ。

強いて、もう一つの共通項をあげるとすれば、それは、良好とはいえない「健康状態」である。従軍中の場合には、前述したようなヘルニアや腸カタルの諸症状、激戦による心身疲労など、『日記』の場合には、後述するような血便、腸の痛み、衰弱、めまいなどをあげることができよう。

こうした孤独で優れない健康状態のなかで、二つの『日記』において、ウィトゲンシュタインは神に向かって頻繁に／直接に語りかけ、祈りを捧げたのである。

筆者が小屋の跡を訪れた「三月四日」の日記

『日記』には、日付（月と日）が記されているが、時々「年」が書きこまれている。おそらく、何か改まった気分やある種の思い入れがあることを示唆しているのだろう。そうしたものの一つが「一九三七年二月二八日」である。この直後から、太陽の記述が頻繁に登場し、それは三月三〇日まで続く。

計量的なことをいえば、次のようになる。この三一日間に日記を書いた日数は、全部で二五日である。これらのうち、太陽に言及した記述があるのが、一一日分である。すなわち、三月四日、八日、一四日、一七日、一八日、一九日、二二日、二三日、二四日、二七日、三〇日。これは、ウィトゲンシュタインには日記にその日の天候を書き込む習慣がなかったことを考慮すれば、かなりの頻度であろう。さらに、次のようなことも言える。「太陽」は女性名詞、die Sonne であり、『日記』ではこれを Sie/sie という代名詞で受けることもある。そうすると、例えば三月一九日の

日記では、die Sonne は一度し出てこないが、Sie/sie を含めると、「太陽」は全部で七回も登場するという具合である。それゆえ、この三一日間の太陽への言及頻度は極めて高いと言える（「月」についての言及は一度もない）。

三月以前には、太陽は稜線の下側にあってあまり見えず、これ以降に、稜線の上に出てくるのであろう。三月八日には、「私は今、自分の家から太陽が見えるのをとても待ち焦がれている。そして毎日、あと何日間太陽がまだ見えないのか見積もっている」とある。『日記』に登場する「太陽」という言葉の頻度ならびにそれについての記述は、「太陽が見えるのをとても待ち焦がれている」ウィトゲンシュタインの姿を彷彿とさせる。

その頃、ウィトゲンシュタインの健康状態はそれほど良くなかった、と推測しうる。その根拠として、三月前後の日記の二か所をあげよう――「身体の具合が悪い。非常に弱っており、めまいがする」（一月三〇日）、「血便が繰り返し出るようになってからもう二か月になる。痛みも少しある。――ひょっとすると、自分は直腸癌で死ぬかもしれないと頻繁に考える」（四月二〇日）。

哲学的著作の執筆にも大変な思いをしているうえに、孤独であれば、ましてや厳冬期で体調が思わしくない状態での孤独であれば、神に祈りを捧げたり語りかけたりしたくなるだろうし、太陽の陽射しは何にもまして有り難いものであろう。

筆者がウィトゲンシュタインの小屋の跡に立ったのは、二〇一四年三月四日の午後一時頃から二時頃である[18]。気温は六―七度で、天候は曇り（ときどき小雨）。風も少し吹いていた。太陽は直接には見えなかった。太陽についての言及が頻繁になるのは、偶然にもこの三月四日からである。その日にはこう書かれている。

> ああ主よ、自分が〔あなたの〕奴隷だということさえ分かればよいのですが！
>
> 今太陽が私の家にとても近づいている。ずっと元気に感じる！　身に余るほど調子が良い。

言うまでもなく、「ああ主よ、自分が〔あなたの〕奴隷だということさえ分かればよいのですが！」というのは、神の属性などに「ついて」語っている言葉ではない。これも神に対して直接語りかけている言葉である。

この日の日記はこれだけである。前日の三日には「ひざまずくことが意味しているのは、人は〔主の〕奴隷だということである。（ここに宗教が存するのかもしれない）」と記されている。この続きで、右の文章が書かれているのである。ウィトゲンシュタインは自分が主の奴隷となり、自分を放下することを求めていたのだ。しかし、これは簡単なことではなかった。

この「主の奴隷」という概念は重要であり、これは『日記』でも一貫したものである。例えば、一月二八日に「自分に対して、俺は自由な人間ではなく奴隷だ、と言わなければならなかった」とあるのだが、これに続けて、「信仰が人間を幸せにするというのがどういう意味なのかわかった。それは、信仰は人間を直接神のもとにおくことにより人間に対する恐怖から解放する、ということなのだ」と言う。「ひざまずく」という表現にしても「膝に助けてもらって祈るのではない、人がひざまずくのだ」（二月一九日）と述べられている。

三月四日の書付は、右のような文章の流れの中で理解されるべきものだが、きわめて示唆的である。なぜならば、「ウィトゲンシュタイン」「神」「太陽」という三項が端的に現れているからだ。さらに、これは、先述したように、「太陽」という言葉が集中的に登場し始める最初の部分にもあたる。この日以降、『日記』の論述は「これらの三項を軸として展開されている」といってもよい。一言でいうと、神とウィトゲンシュタインとは、早春の太陽を媒介にして結ばれているのだ。

太陽や光と関わる宗教的な論述

二月二一日の日記に「周りが冬であるように、私の心の中は（今）冬だ。すべてが雪に閉ざされ、緑もなく、花もない。／だから私は、春を見るという恵みが自分に分かち与えられるのかどうか、辛抱強く待たなければならない」とある。

これは、厳冬期の自然環境とそれに対応する自分の心境の描写だが、そのままウィトゲンシュタインの宗教的展開にも当てはまる。すなわち、春の訪れとともに、精神的葛藤を経ながらもある宗教的高みへと至るプロセスが訪れ、「恵みが自分に分かち与えられる」ことになるのである。

ウィトゲンシュタインが達した一つの宗教的境地としても、また、太陽が彼の神観・宗教観となんらかの関係をもつという観点からも、先に引用した三月二六日付けの日記が注目される。

私は、自分のあるがままにおいて、自分のあるがままに照らされ、啓かれている。私が言いたいのは、私の宗教は、そのあるがままにおいて、そのあるがままに照らされ、啓かれている、ということだ。私は、昨日、今日よりも照らされ方が少なかったわけではないし、今日、昨日より多く照らされているわけでもない。なぜなら、もし昨日、私が事をこのように見ることができたのなら、私は確かにそう見ただろうからである。

erleuchten という言葉の重要性についてはすでに指摘したが、ここにはもう一つ重要な事柄がある。それは、「あるがまま」(als ich bin, als meine Religion ist) ということだ。右の書付に六年も先立つ、一九三一年三月一日の日記には次のように書かれている。

ベートーヴェンはまったくのリアリストだ。私は、彼の音楽はまったくの真理だ、と言っているのだ。私はこう言いたいのだ、彼は人生をまったくそのあるがままに見て、それからそれを高めるのだ、と。それはまったく宗教であり、宗教的な詩などではない。……彼は英雄として、世界をそのあるがままに見ることにより、世界を救うのである。(三一年三月一日)

ベートーヴェンのことは別として、ここにウィトゲンシュタインの核心的宗教観（の一部）が出ている。すなわち、彼は「人生や世界をそのあるがままに見て、それを高めるのが宗教だ」と考えているのである。この「人生をまったくそのあるがまま見る」(Sehen das Leben ganz wie es ist) ということが、三月二六日の彼の宗教的境地に繋がっていくのである。

ここで、erleuchten の使用頻度を見てみよう。この語は、二月二八日―三月三〇日の間にも、全部で三回しか登場しない。つまり、先に引用した三月二三日・二五日、そして二六日の三回である。

また、「光」をめぐる論述については、次のようなものが注目される。

自分の感覚に従うなら、彼〔真に義を求める人〕はただ光を見るだけではなく、直接に光の下へおもむき、今や光とともにある本質を持つようになる（mit ihm〔das Licht〕nun eines Wesens werden）、と言えるだろう。（二月一五日）

人間はおのれの日常の暮らしを、消えるまでは気がつかないある光の輝きとともに送っている（*Der Mensch lebt sein gewöhnliches Leben mit dem Scheine eines Lichts*）。それが消えると、生から突然あらゆる価値、意味、あるいはそれをどのように呼ぶにせよ、そうしたものが奪われる。人は突然、単なる生存――と人が呼びたくなるもの――がそれだけではまったく空疎で荒涼としたものであることを、悟る。まるで、すべての事物から輝きが拭い去られてしまったかのようになる。すべてが死んでしまう。（二月二二日）

そしてさらに、春が到来し、「今日、太陽はここで一二時に昇り、今、完全に現れている」「今朝、樹々は厚い雪に覆われていたが、今、それはすべて融けている」という三月二二日、ウィトゲンシュタインは次のように認める。

ここには誰もいない、しかし、ここには壮麗な太陽（*eine herrliche Sonne*）があり、そして、一人の卑しい人間（*ein schlechter Mensch*）がいる。

鬼界訳では「壮麗な太陽」（英訳では *a glorious sun*）だが、herrlich は「神の栄光」（die Herrlichkeit Gottes, the glory of God）という成句にも使用され、宗教的なニュアンスも持つ（ちなみに、「主」は “Herr” である）。そうすると、この太陽はたんなる天体としての太陽ではなく、一種の「神の現れ」とも解釈しうる。「一人の卑しい人間」というのは言うまでもなくウィトゲンシュタイン自身であり、彼は「単独者」として、太陽を介しながら、神と対峙しているのである。[19]

ここで、三月二六日の前日、二五日の日記について検討したい。三月月二四日と二五日の日記は、「三月二五日」という強調された日付の区切りがあるものの、一続きの文章（「私は……と考えた」）である。そして、「ここ二日まったく良く眠れない、自分が死んだように感じられ、仕事ができない。考えが濁っていて、暗く意気消沈している。（つまり、私はある宗教的な考えを恐れているのだ）」という言葉で結ばれている。

こうした意気消沈も見られる流れの中で二六日の日記を読むと、そこには、それ以前の日々と比較して、ある種の精神的安定や落ち着きを読み取ることができる。例えば、「良く眠れない」二三日には、「明日私の信仰は今日よりも明るくなったり（あるいは暗くなったり）することはあるのだ」と言っておきながら、先に引用したように、二六日には、それを否定するとも解釈できるような書き方をしている

私は、昨日、今日よりも照らされ方が少なかったわけではないし、今日、昨日より多く照らされているわけでもない（Ich habe mich gestern nicht weniger erleuchtet & heute nicht mehr）。なぜなら、もし昨日、私が事をこのように見ることができたのなら、私は確かにそう見ただろうからである。

ここには一種の精神的安定を読み取ることができよう。

三月二六日の太陽

この日の日記からは、太陽の状態は確定できない。すなわち、「照らされる」（erleuchtet）は、霊的光／精神的光のみと関係するのか、それとも、物理的な太陽の光とも関係するのか、を確定できないのだ。なぜならば、「太陽」という言葉が直接には登場しないからだ。しかし、三月二二日、二三日、二四日、二七日の太陽をめぐる記述から判断して、二六日に太陽が出ていた可能性は高い。

今日、太陽は一一時四五分頃から一時一五分頃まで出ていて、それから三時四五分頃、一瞬山の上に現れた。そして、日没前に部屋の中に射し込んでいる。（三月二三日）

太陽はだいたい一時半頃に現れるが、その後も山の端に沿って進んでいるので、その外縁はもっと長い間見えている。それは壮麗だ！（三月二四日）

今や、太陽は一一時を少し過ぎると昇る。今日、それは光り輝いている。くり返し太陽を見つめないことは私には難しい。つまり、目に悪いと分かっていながらも、くり返し太陽を見つめたくなってしまうのだ。（三月二七日）

このように、二二日、二三日、二四日、二七日には、ウィトゲンシュタインが太陽を見たことを確認できる。そうだとすれば、「二六日にも彼は太陽を見た」と推測するのが自然であろう。

次に、太陽の出現／非出現とウィトゲンシュタインの精神状態との相関関係[20]から、三月二六日の太陽の出現について推測してみよう。二六日の日記の結びの言葉は「神の恵みのおかげで（*aus Gnade*）、今日は昨日よりもずっと調子が良い」というものである。

「調子」「気分」「仕事」と太陽の相関関係を述べた文章には、例えば次のようなものがある――「今、太陽が私の家にとても近づいている。ずっと元気に感じる！　身に余るほど調子が良い」（三月四日）、「さきほど本当に太陽が見つかったとき、私はとても嬉しかった」（三月一八日）、「もっと太陽を見ることができたなら、私の仕事をする力は回復するのではないかと期待していたが、そのようにはならなかった」（三月三〇日）。さらに、二六日のおよそ一か月前、太陽が稜線のうえに昇ることのない二月二二日には、次のように書かれている――「こんなこと〔生全体が掘り崩されること、震えながら深淵の上に吊るされることなど〕を私が考えるのは、もしかすると、ここにはあまりにも光が乏しいためである。しかし、今ここでは光は現にかくも乏しく、この私がそうした考えを抱いているのだ」。

こうした引用から推測すると、この頃のウィトゲンシュタインは、太陽が出ていれば、調子や気分や仕事する力や思索内容などが良好になる／前向きになるのである。そして、太陽が出ている時、その時に限定すれば、彼の気分や

調子はそれなりに良好だったと推測しうる。それゆえ、三月二六日の彼は「神の恵み」＝「太陽」のおかげで「調子が良い」という解釈も十分に成り立つ。もちろん、一日は二四時間であり、日中に太陽が見えたとしても、夜になって意気消沈することは当然ある（例えば三月二五日はその例かもしれない）。それでも、こうしたことは言いうる。

以上に述べた、①二二日、二三日、二四日、二七日の太陽の出現、②太陽とウィトゲンシュタインの精神状態、③二六日の日記の最後の言葉などから総合的に判断すると、「彼は三月二六日に太陽を見た」と推測しうる。すなわち、太陽がこの日、先に論じたような宗教的高み／宗教的境地へウィトゲンシュタインを至らしめた可能性は、極めて高いのである。

「あるがまま」と「光」の関係

「物事をあるがままに見る／あるがままにしておく／あるがままに引き受ける」ということは、ウィトゲンシュタインが生涯にわたって求めた、彼のあるべき姿勢である（戦争についても同様である）。これについては、彼の諸著作で種々の表現をもちいて述べられているが、本論文と関係の深い『哲学探究』では、例えば次のように書かれている。

哲学は、すべてのものを、そのあるがままにしておく（Die Philosophie läßt alles, wie es ist）。（第一部第一二四節）

引き受けるべきもの、与えられたもの、それが生活形式である（Das Hinzunehmende, Gegebene seien Lebensform）。（第二部第一一章）

これらの「あるがまま」「引き受けるべき」ということと、先に引用した「人間はおのれの日常の暮らしを、消えるまでは気がつかないある光の輝きとともに送っている」という文章の関連について述べると、次のようになるだろ

う――ウィトゲンシュタイン（およびその他の人々）の日常の生活が宗教的な光によって照らされ、意味を与えられているのならば、その生活を変える必要はなく、それをそのあるがままに引き受けるだけで良い。

三月二六日の日記は、外界で起こることも、自分自身もふくめて、すべてを「あるがままに見る／受け入れる」という心境になったことを述べていると思われる。

しかし、これですべてが解決したのではない。さらに考えるべき事柄は、三月二六日に「あるがままにおいて、あるがままに照らされ、啓かれている」のは「自分」であり「自分の宗教」だということである。ベートーヴェンの引用ならびに右の『探究』からの二つの引用においては、「自分の外にあるもの」「自分以外のもの」をそのあるがままに受け入れる、という印象が強い。だが、この日の書付において「あるがまま」なのは「自分」ないし「自分の宗教」である。

そこで、問題となるのは「ウィトゲンシュタインが自分自身をあるがままの状態で受け入れられたのか否か」である。実際のところ、彼は常日頃「自分自身をより良い生き方をできる人間に変えたい」と考えていた。[21] ドゥルーリーは「自分自身の生活の仕方のすべてを変えようという、常に持ちつづけたウィトゲンシュタインの意志に対して同情や理解を感じないとすれば、彼を理解することはできない」[22]と証言している。また、ウィトゲンシュタインが自分自身を嫌悪していることは、『哲学宗教日記』にも執拗なまでに書かれている。すなわち、彼は、嫌悪の対象である自分からいかに脱すべきか、という問題と格闘しているのである。[23] さらに、『秘密の日記』においては、「死の恐怖に怯える自分を変えたい」「周りの人々とうまくやっていけない自分を変えたい」という旨の書付が何度も見られる。

以上のように、その都度その都度、現在の自分を容認できない／より良い人間になることを願っているウィトゲンシュタインが、どうして三月二六日に「私は、自分のあるがままにおいて、自分のあるがままに照らされ、啓かれている」と述べることができたのかは、彼の内面的なことはその日の日記からは読み取れないので、推測するしかない。筆者は、ウィトゲンシュタインがこのように述べることができたのは「太陽を見ることを待ち焦がれていた彼に対す

る、温かい太陽の光の影響が大きいに違いない」と推測するのである。

また、この日のウィトゲンシュタインの体験を「宗教的高み」「宗教的境地」と表現したことの理由は、彼があるがままの「自分」を「あるがままに受け入れた」ことにある。落ち着いた精神状態で自分自身をこのように捉えることができる機会は、ドゥルーリーの証言からもわかるように、ウィトゲンシュタインの生涯でもそれほど多くはないのである。

結語

これまで行なってきたように、『秘密の日記』にある「光」や「照明」の記述を踏まえて、『哲学宗教日記』を読み、一九三六年の冬から翌年の春先にかけてのウィトゲンシュタインが置かれた状況の諸要素（体調不良、孤独に追い込む自然環境、日照時間の短さ、太陽の状態など）を考慮したうえでの細やかな結論は、以下のようなものである。

病める魂の持ち主であるウィトゲンシュタインは、早春で太陽が現れる機会が少ないショルデンの小屋において、「単独者」として神に向かい、頻繁に神に祈りを捧げたり神に語りかけたりした。そのさい、これらの行為が光や太陽と結びつくことがかなりあり、一九三七年三月二六日の日記に見られる宗教的高みないし宗教的境地への到達には、春先の温かい太陽の光がこれを促した。[24]

本論文での考察は、ウィトゲンシュタインという一人の人物、ノルウェーのショルデンの山中という狭い場所、一九三七年の三月という短い期間に限定したものでしかない。しかしながら、「光と宗教」「太陽と宗教」という宗教学における重要なテーマをめぐる一つの事例――光や太陽が宗教や宗教体験と極めて密接な関係を結んでいることの事例――を提供したであろう。[25]

写真１　ショルデンの展望

奥がソグネフィヨルドの終わりの部分。左側がウィトゲンシュタインの小屋のあった湖、Eidsvatnet。

写真３
南側から見た小屋の基礎部分の石組みの一部

小屋を取り囲む山々の傾斜もかなりきつい。小屋はどこにでも建てられるというわけではない。

写真２　在りし日の小屋

1947 年に B. Richards 氏が撮影したもの。
この写真と写真５を見ると、マクギネスが「柱頭行者」に言及したのも頷ける。

写真４　小屋跡から南側を望む

当日、太陽は出ていなかったが、雲の切れ目から明るい部分が見えた。精確な仰角はわからないが、山が近くにあるので、太陽は春になってかなり高く昇らないと見えない、と推測できる。

写真５　小屋跡からショルデンの中心部を望む

それは小屋のほぼ真西の方向にある。

註

(1)「コーダー遺稿」と『哲学宗教日記』（後掲）などとの関係については、ゾマヴィラによる「編者序」（“Editorische Notiz”）を見よ。

(2) *Ludwig Wittgenstein: Public and Private Occasions*, ed. by J. Klagge and A. Nordmann, Oxford, Rowman & Littlefield Publishers, INC, 2003. この中に、『秘密の日記』の英訳（*Movements of Thought: Diaries, 1930-1932, 1936-1937*）も含まれている。

(3) Ludwig Wittgenstein, *Denkbewegungen: Tagebücher 1930-1932/1936-1937*, hrsg. von I. Somavilla, Innsbruck, Haymon-Verlag, 1997. 鬼界彰夫訳『ウィトゲンシュタイン　哲学宗教日記』講談社、二〇〇五年。『日記』からの引用文は、基本的にこの鬼界訳を使用する。ただし、一部、句読点や用字を変えた部分や、原文を参照のうえ訳語・訳文に変更を加えたところもある。引用文において、斜体は暗号体で書かれていることを、一重／二重傍線は強調を、点線は表現の不確定さを表している（訳書の「凡例」参照）。

(4) Ludwig Wittgenstein, *Geheime Tagebücher 1914-1916*, hrsg. von W. Baum, Wien,Turia & Kant, 1991. なお、この『秘密の日記』も参照しながら、ウィトゲンシュタインの従軍体験などを宗教的観点から考察する長編ブログを、二〇一四年一一月一日から開始した――「戦場のウィトゲンシュタイン――人類史上初の世界大戦という地獄を闘い抜いた勇敢な兵士にして哲学者の物語」。

(5) ウィトゲンシュタインは「語りうる」事実の世界と、「語りえない」宗教の世界とを峻別した。この二つの世界を結びつけるのが、「祈り」という言語行為である。祈りはウィトゲンシュタインにとってきわめて大切な行為である。筆者は、次の論文において、現象学者のA・シュッツの「多元的リアリティ」論とウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」論を結び付けて、このことを詳細に考察した。Keiji Hoshikawa, ”A Schutzian Analysis of Prayer with Perspectives from Linguistic Philosophy,” forthcoming.

(6) Norberto Abreu e Silva Neto, “Facing up to Wittgenstein’s Diaries of Cambridge and Skjolden: Notes on Self-knowledge and Belief,” in UNSPECIFIED Austrian Ludwig Wittgenstein Society, 2003, p. 12.

(7) 鬼界、前掲訳書の「訳注」一五二頁。

(8) 同「訳注」一五三頁。

(9) この写真は、小屋の移築計画のノルウェー語のパンフレットにある。

(10) 黒崎宏「ウィトゲンシュタイン紀行」（『言語ゲーム二元論――後期ウィトゲンシュタインの帰結』勁草書房）、一九九七年、一八二頁。

(11) Brian McGuinness, *Wittgenstein: A Life Young Ludwig 1889-1921*, Berkeley, The University of California Press, 1988, p. 202. 藤本隆志ほか訳『ウィトゲンシュタイン評伝――若き日のルートヴィヒ　1889-1921』法政大学出版局、一九九四年、三四七頁。

(12) M. O’ C. Drury, “Some Notes on Conversations with Wittgenstein,” in *Recollections of Wittgenstein*, ed. by R. Rhees, (Oxford, Oxford University Press, 1984), p. 79.

(13) 鬼界彰夫「隠された意味へ――ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』（MS183）訳者解説」（前掲訳書、所収）二九六頁。

(14) 『論考』の最後の「語りえないもの」とは何かについては、次の論文を見よ。星川啓慈「『論理哲学論考』における〈語りえないもの〉と〈沈黙〉をめぐる新解釈――ウィトゲンシュタインの生涯において〈文番号七〉がもった意味」（『宗教研究』第三六二号、日本宗教学会、二〇〇九年、所収）。

(15) McGuinness, op. cit., Chap. 7. マクギネス、前掲訳書、第七章。

(16) 一九一五年のウィトゲンシュタインに関するある報告書では、次のことが書かれている。①（たぶん戦争前の）三つの医学的所見においてまったくの「兵役不適格」とされていること。②ヘルニアの再発と乱視性近視のため

に「前線勤務はまったく不適当」であること。McGuinness, op. cit., p. 237. マクギネス、前掲訳書、四〇二頁。

(17) この攻勢については、最近では次のような研究書がある。Timothy Dowling, *The Brusilov Offensive*, Bloomington, Indiana University Press, 2008.

(18) 筆者がショルデンから持ち帰った情報やデータは、本論文、ブログ、YouTube への動画のアップなどを通してすでにいくつか発表している。①動画「ウィトゲンシュタインのノルウェー（一五分版）」（松野智章撮影・編集、YouTube）、②写真入りの連載ブログ「哲学者ウィトゲンシュタインが一〇〇年前にノルウェーのソグネフィヨルドの最奥部の山中に建てた〈小屋〉の跡を訪れて」（全六回）、③エッセイ「ウィトゲンシュタインの〈小屋〉の跡を訪ねて――『哲学宗教日記』をめぐる〈太陽〉の物語」（『春秋』第五五九号、二〇一四年）。とりわけ、①の YouTube の動画を見れば、小屋の跡へ至るゴツゴツした険しい道の様子や、そこからの周囲の景観が詳細にわかる。この意味において、世界的に貴重な映像記録である。今後も、「小屋の移築計画」や「ウィトゲンシュタイン・アーカイブズ」についての動画を YouTube にアップする予定である。

(19) 太陽＝神ではない。太陽は、あくまでも、神とウィトゲンシュタインを媒介する存在である。

(20) 「太陽体験」について精神病理学的視点から書かれている次の論文集は、ウィトゲンシュタインを理解するうえでも参考になる。宮本忠雄『病跡研究集成――創造と表現の精神病理』金剛出版、一九九七年。とりわけ、そこに収められている「太陽と分裂病――ムンクの太陽壁画によせて」は、太陽と宗教性・創造性・治癒などとの関係を知る上で有益である。

(21) 星川啓慈『宗教者ウィトゲンシュタイン』法藏館、一九九〇年、一五七―一六六頁、参照。

(22) Drury, op. cit., p. 77.

(23) 星川啓慈「自己嫌悪する自分から〈あるがまま〉の自分へ――ウィトゲンシュタインのキリスト教信仰」（星川啓慈・松田真理子『統合失調症と宗教――医療心理学とウィトゲンシュタイン』創元社、二〇一〇年、所収）。

(24)さらに踏み込めば、「太陽がウィトゲンシュタインにそうした宗教体験／宗教的境地をもたらすことに具体的にどのように作用したのか」という問題もある。しかし、これについて答えることは不可能である。その理由を、『日記』にそれと関連する記述がないことに加えて、いくつか挙げれば、以下のとおりである。①当日、彼の小屋から太陽が彼にどのように見えたかは、いかなる手段（自然科学的なものをふくめて）によっても正確に突き止めることはできない。②彼がそうした宗教体験／宗教的境地に至った時刻も判明しないから、「現在形」で書かれているそれらの体験／境地と太陽の状態とを照合することもできない。

(25)本論文で論じられた「ウィトゲンシュタインの宗教体験と太陽の関係は、新プラトン主義を始めとする西洋思想の中にいかに位置づけられるのか」という問題意識をいだく読者もいよう。しかし、そうした位置付けや関連付けの試みは、おそらく論証不可能であるうえに、あまり意味がないであろう。

付記

(1)本論文は「ウィトゲンシュタインの〈小屋〉の跡を訪ねて――『哲学宗教日記』をめぐる「太陽」の物語」（『春秋』二〇一四年、第五五九号）を大幅に加筆したものである。

(2)本論文は、平成二五年度日本学術振興会科学研究費（課題番号二五二四四〇〇二）の助成を受けたものである。

(3)写真1・写真3・写真5は渡辺隆明氏、写真2はB. Richards氏、写真4は松野智章氏によるものである。

The Sun and Wittgenstein's Religious Experiences:

The Analysis of His Diary Written in March of 1937

Keiji HOSHIKAWA

Abstract

The second part of Wittgenstein's diary, *Movements of Thought*, was written in his house on the mountain in Skjolden, Norway during the winter of 1936-1937. We can see in it Wittgenstein's personality as a "homo religiosus." I visited the remains of his house at the very beginning of March in 2014 and came to appreciate the natural environment (the geography, climate, living things, etc.) which must have had some influences on his sense of solitude, religious experiences or personal contact with God. My experiences and the data acquired there are very helpful to understand the religious contents of the diary.

I will analyze the correlation between the state or appearance of the sun and Wittgenstein's state of mind, religious experiences or personal contact with God, focusing on the description of March 26th, 1937: "I am as illuminated as I am; I mean: my religion is as illuminated as it is." My hypothesis is that the appearance of the sun made some contributions to Wittgenstein's ascent to this religious experience or state of mind. I will prove this by referring mainly to the other parts of the diary and another diary, *Secret Diaries*, written during 1914-1916.